

仮面ライダークウガ～A new legend～

内海椎茸

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

未確認生命体事件から10年、アンノウン事件から8年たった2010年。

再び起こる連続殺人。

そこに5人の戦士が再び立ち上がる。

目次

遊戯再開
伝説戦士

4

1

遊戯再開

川浴いで男と犬が走っていた。

男の名前は葦原涼。

八年前アンノウンと戦っていた人間の一人。

犬はその戦いの後、葦原が拾った犬だ。

しばらく走っているのと前から一台のバイクが走ってきた。

??? 「こんにちはー!」

すれ違う瞬間、バイクに乗った男が話しかけてきた。

葦原「… こんにちは」

??? 「かわいいワンちゃんですね! なでてでもいいですか?」

男はバイクを止めると、ヘルメットを外しこつちに寄つて来た。

葦原「… どうぞ」

と言う前に男はすでに犬をなで始めていた。

犬は勢いよく尻尾を振り、男の顔を舐めまわす。

(変な奴だ…。)

少し男の後ろのバイクが気になった。

(なんだあのバイク…、見たことが無い。改造バイクか?)

??? 「あのバイクが気になりますか?」

葦原「… はい。以前バイク店で働いてたのですがあんなバイク見たこと無いので…」

??? 「あれはですね! 警察で使われているトライチェイサー2000と言うバイクです!」

葦原「警察? あなたは一体…。っ!」

変な気配がした。

忌まわしい気配だ。

奴らがまたやってきた。

葦原「すみません! 犬お願いします!」

??? 「どうしちやったのかな? あの人?」

しばらく犬をなでていると携帯が鳴り始めた。

??? 「電話? 珍しいな」

携帯を取り出し開くと、画面には一条と表示されていた。

人が沢山いる街中、ビルの上に怪しい影が一つ。

それは蜘蛛のような顔をしていた。

??? 「ガデ・ゲゲルン・ガギバギザ（さて、ゲゲルの再開だ）」

蜘蛛のような怪人は口から糸を吐き、ビルからビルへと飛び移っていった。

葦原は自分の家からバイクを走らせ、気配を追っていた。

（奴らとは少し気配が違う。もっと攻撃的な強い殺人衝動を持つた…）

ビルの屋上では一人の男性がタバコを吸っていた。

男性がタバコを吸っていると、後ろから蜘蛛の怪人が男性に襲い掛かる。

2秒くらいたった後、大量の血液と男性の首が地面に落ちた。

男性の首が地面に落ちると怪人はすぐさま隣のビルに向かって糸を吐く。

怪人が隣のビルに飛び移ろうとしたその時…

??? 「ガアアアアア！」

真横から緑色の怪物が飛び込み、糸を切断する。

蜘蛛の怪人「ザセザ・ビガラ！（誰だ貴様！）」

緑色の怪人の名前はギルス。

葦原涼が変身した姿だ。

ギルス「グルアアアアア！」

ギルスは怪人にむかって蹴りを入れる。

が、怪人はギルスの足を掴み扉に叩きつけさらに糸を巻きつける。

蜘蛛の怪人「ゴパシザ（終わりだ）」

怪人はそう言うのとギルスの首を締め付ける。

ギルス「ぐううう…」

ギルスは怪人に向かって蹴りを何度もいれるがまるで効かない。

蜘蛛の怪人「ゾグザ、ブスギギ・ザソグ？（どうだ、苦しいだろう？）」

ギルス「このままじゃ…。」

??? 「葦原さん！」

ふと葦原を呼ぶ声があり、怪人が吹き飛ばす。

周りを見回すと、もう一体の怪人がいた。

黒いボディに金色の装甲、頭には金の角と赤い目。

もう一体の怪人の名前はアギト。

津上翔一という男が変身している。

ギルス「津上…、なんでこんなところに…!?」

アギト「警察から依頼が来たんですよ！じきに氷川さんも来ます
！」

アギトはギルスに手を差し伸べのべ立ち上がるのを手伝う。

ギルス「さてと…。」

二人は怪人の方に向き直り構えをとった。

アギト「第2ラウンドを始めますか！」

伝説戦士

ギルス「さて・・・」

アギト「第2ラウンドを始めますか！」

二人は構えをとり蜘蛛の怪人に向かって突撃していく。

蜘蛛の怪人「リントズゼギガ・・・バレスバ！（人間風情が・・・舐めるな！）」

アギト「なんて？」

ギルス「馬鹿っ！気にするな！」

立ち止まったアギトの後頭部をギルスが叩く。

蜘蛛の怪人「？」

アギト「痛っ！何するんですか!？」

ギルス「お前が変なことに気をとられてるからだ！」

二人はギャーギャーと揉めあい始める。

アギト「言われなくても!・・・あれっ？」

ギルス「どうした?・・・あっ！」

二人が揉めあってる間に蜘蛛の怪人は逃げてしまった。

ギルス「津上！お前のせいだぞ！」

アギト「葦原さんが僕の事気にせずに戦ってたら逃げられませんでしたよ！」

???「まあまあ、二人ともそのへんにしませんか？」

アギト・ギルス「だまってて（ろ）！」

ギルス「つて、お前!？」

???「どうかしました？」

ギルス「お前！犬はどうした!？」

???「犬?・・・ああ！あの時の人ですか！」

ギルス「それより！犬は!？」

???「犬ならあそこにいますよ。」

男が指をさした方を見ると、そこには犬のリードを持った・・・

G—5が立っていた。

1日後、津上が居候している家の居間に津上、葦原、尾室、謎の男性が集まっていた。

尾室隆弘は警察庁のG-5ユニットの隊長だ。

翔一「だーかーらー！悪いのは葦原さんですって！」

葦原「お前がボーっとしてるのが悪い。俺一人で戦ってたら勝ってた。」

翔一「そんなこと言って葦原さんぼろ負けだったじゃないですか！」

尾室「もうこの辺にしときましょうよお。」

葦原「うるさい！」

???「まあまあ」

謎の男性が葦原をなだめる。

翔一「そういえば…、どちら様？」

???「ああ！そういえば自己紹介がまだでしたね。」

謎の男性が服のポケットを漁り何かを取り出そうとする。だが、取り出す前に玄関のチャイムが鳴る。

家の前には二人の男性と一人の女性が立っていた。

翔一「はい。」

三人が待っていると翔一が玄関の扉を開く。

氷川「お久しぶりです！津上さん！」

翔一「あっ！氷川さん！お久しぶりです！」

翔一は氷川の後ろにいる二人を覗き込む。

翔一「後ろのお二人はだれでしょうか？」

氷川の後ろにいる男性が答える。

一条「本日から未確認生命体対策本部に復帰した一条薫です。こちらの女性は私の部下の…。」

夏目「夏目実加です。よろしくお願います。」

翔一「一条さんに夏目さんですか！よろしくお願います！」

一条「あっ、これどうぞ。僕の知り合いが厄介になってるそうじゃないですか。」

翔一「そんなに迷惑してないので大丈夫です。昨日は喧嘩を止めて

くれましたし。」

翔一は一条から荷物を受け取る。

翔一「いやあでも氷川さん、すらつとステキな『コートを着たハンサムさん』のまままで『びっくりしたなあ、もう』by美波伸介ですよ！」

氷川「え？そうですか？」

誰も気づいていないが、関係ない一条の顔が少し固まっていた。

一条「と、とりあえず知人だけ拾って僕らは先に警視庁に戻つてますね。」

一条が家の中に入ろうとすると三人が家から出てきた。

尾室「氷川さん遅いですよ。」

葦原「俺はもう帰る。津上、邪魔したな。」

葦原は犬のリードを持ち、その場から立ち去る。

???「あれ？実加ちゃん？」

夏目「五代さん！お久しぶりです！」

五代「久しぶり！」

尾室「あのくそちらの男性は？」

五代「あっ、そういえば！」

五代は上着のポケットから名刺を取り出し、氷川、尾室、翔一に渡す。

氷川「夢を追う男？」

尾室「五代雄介？」

翔一「2010の技を持つ男？」

五代「はい！」

翔一「すごいですね！今全部やれますか!？」

五代「全部はちよつと…、あれ？一条さんどうしたんですか？」

翔一と五代がしゃべっているとき一条が電話をしていた。

一条「未確認生命体が出たらしい。氷川さんと尾室さんはG-5と

G-3Xを取りに行った。」

夏目「津上くんは車に乗って！」

夏目が車の助手席の扉を開き、津上を乗せようとする。

翔一「僕はバイクがあるのでお構いなく！」

翔一と夏目はそれぞれ同じ方向に走り去っていく。

一条「五代は俺と来い。」

五代「わかりました！」

翔一「夏目さん！」

翔一がバイクで走りながら隣の車に話しかける。

夏目「どうしたの!? 津上くん！」

翔一「俺、先にいってます！」

津上の腰にはベルトが巻かれていた。

翔一「変身！」

津上はバイクのハンドルから手を離し、ベルトの左右に付いているボタンを同時に押す。

すると翔一の体は金色の戦士アギトに変わり、バイクはアギト・トルネイダーに変わる。

夏目「へえ、あれがアギトかあ。強そうだなあ。」

夏目は走り去るアギトを見ながら呟いた。

警官「うあああああ！」

暗い公園で警官が蝙蝠の怪物に向かって発砲していた。

蝙蝠の怪物は銃弾を弾くと、警察官の飛びかかった。

警官「助けてくれええ！」

蝙蝠の怪人の爪が警官の喉に刺さる寸前、何かが蝙蝠の怪人の爪を受け止めた。

アギト「大丈夫ですか!？」

警官「あつ、ありがとうございます！」

警官はアギトを確認すると、すぐに逃げ出した。

アギトは左の拳で蝙蝠の怪人を殴り飛ばす。

蝙蝠の怪人「ガギツガ・グムン・バ・ボ・ギデデギダジャズバ…（あ

いつがグムン・バの言っていた奴か…）」

アギト「はあ！」

アギトは怪人に急接近し、回し蹴りを喰らわす。

蜘蛛の怪人「ギギ・ベシザ（良い蹴りだ。）」

怪人はアギトの足を掴む。

蜘蛛の怪人「ザガ・ビバン！（だが、効かん！）」

足を掴んだ手に力を入れ、アギトを投げ飛ばす。

アギト「うああ！」

アギトは木に衝突し、動けなくなる。

蜘蛛の怪人「ジョパギバ（弱いな）」

怪人はアギトにゆっくりと近づいていく。

アギト「くそ…。」

アギトは足に力を入れようとするが力が入らない。

怪人とアギトの距離がどんどん詰まっていく。

蜘蛛の怪人「ゴパシダ！（終わりだ！）」

??「待ちなさい！」

急に女性の声が響く。

アギトが声のした方を見るとそこには夏目が立っていた。

アギト「夏目さん!?!危ないです！逃げてください！」

アギトは必死に立ち上がろうとする。

夏目「津上くんはそこでじっとしてて！」

夏目はアギトを止めると左腕を腰に添え、右腕を左斜め上に伸ばす。

腰をよく見るとそこにはベルトが巻かれていた。

夏目「変身！」

一定の動作を終えるとベルトの左側にあるボタンを押す。

アギト「え？」

夏目は黒いボディに赤い装甲、頭には金の角と赤い目がついている戦士に姿を変える。

アギト「夏目さん…あなたはいったい…。」

アギトはそのまま気絶する。

蝙蝠の怪人「ジャドド・ガゲダ… クウガ！（やっと会えた… クウガ！）」

戦士の名前はクウガ。
古代より蘇った超戦士。